論文の内容の要旨

論文題目　　**『源氏物語』における教育―父と子の関係を中心に―**

Education in *The Tale of Genji*：focusing on the father-child relationship

氏名　　李　芙鏞（イ・ブヨン）

本論文は、『源氏物語』における教育を、父と子の関係から捉えることを目的とするものである。まず、先行研究について触れたい。『源氏物語』は、様々な角度から研究されてきた享受の長い歴史がある。読者に与える影響という側面から、中世には「源氏一品経」で書かれているように、『源氏物語』は男女の「交会の道」を語り、結婚していない娘や独身の男性には悪い影響を与えるという理解が存在した。一方、御伽草子『乳母の草紙』には、姫君の必ず読むべき作品に『源氏物語』が挙げられ、『源氏物語』は結婚していない娘に適切な教養を与えるという判断もあった。また、近世の熊沢蕃山は儒学の立場から、『源氏物語』に学ぶべき婦人の徳目を取り出して注釈し、『源氏物語』を女訓書として捉える。様々な読みが存在している中で、本論は、教育をキーワードとして『源氏物語』を分析するが、教訓を探し出すためではなく、教育の過程から窺える父と子の関係作りの過程に注目した。

関連した先行研究には、『源氏物語』を母と子から読む研究や、『源氏物語』をはじめ平安時代の文学作品における乳母の役割について究明した研究、歴史の観点から家制度を含めて平安時代の文学作品を眺める研究などがある。学んだ点は多くあるが、本論では、母ではなく父を、乳母ではなく父の教育を、社会制度からではなく物語における父と子に中心を置いて、『源氏物語』を新たに読み取ることを試みた。

『源氏物語』の中でも、研究対象を、桐壺と源氏、源氏と夕霧、源氏と冷泉帝といった父と息子に絞り、また、源氏と明石の姫君、朱雀院と女三宮という父と娘に焦点を合わせた。さらに、血縁は繋がっていない、源氏と養女の玉鬘、源氏の息子として育てられる薫についても注目した。

第一編の第一章においては、桐壺帝の光源氏への教育について分析し、その中でも、読書始（ふみはじめ）という言葉から物語を読み解いた。物語の展開において、あえて読書始が行われたことが記される理由に興味を持ち、歴史の例を参照しつつ、源氏の読書始が言及される意味を探った。平安時代の記録を調べた結果、読書始には『御注孝経』がよく使われていたことが窺えた。つまり、源氏の読書始にも同様な意味合いが含まれていると思われ、桐壺帝が子の将来のために学問の力を備えさせていく姿を読み取った。さらに、高麗相人の予言の文脈を『御注孝経』の漢文訓読体に照らし、儒学の影響について指摘した。

第二章においては、源氏の夕霧の教育について分析した。夕霧は幼年時代を左大臣家の大宮のもとで過ごしたが、源氏の教育によって、二人は父と子としてお互いを認識するようになる。その過程を、夕霧の字（あざな）を付ける儀式から、寮試、省試の一連の場面に注目して考察した。源氏に『九条右丞相遺誡』を残した藤原師輔の姿が重ねられることは先行研究の指摘通りであるが、本論では、源氏に菅原道真の父是善の教育態度と類似した姿があることを新たに提示し、その根拠として『菅家文草』の漢詩を挙げた。

第三章においては、源氏と藤壺の密通の子である冷泉帝について取り上げた。従来の研究においては、「罪」の子という視点で、冷泉帝の顔を描写する表現が注目されてきたが、本論では冷泉帝の学問する姿勢に中心を置いた。「薄雲」巻には、出生に関する事実を夜居の僧都から告知されて、漢籍を調べる冷泉帝の姿が描かれているが、その中のでも、「いよいよ御学問をせさせたまひつつさまざまの書（ふみ）どもを御覧ずるに」の表現を詳細に分析し、冷泉帝には儒学の理想的な帝の姿があることを論じた。

第二編の第四章から第六章は、源氏の娘明石の姫君について分析したもので、まず、第四章では「蛍」巻を中心に、姫君に対する物語の教育が、玉鬘の場合と対照的に描かれていることに着眼した。姫君の年齢や水準に合わせて教育を行っていく父源氏の態度を考察し、「点つかる」の用例を新しく取り上げ、先行研究を踏まえながら、源氏の教育態度には儒学の中庸の教えと重なる所があると論じた。

第五章では、「梅枝」巻の表現から、源氏の須磨・明石の絵日記を眺めることを試みた。特に、娘に伝えられる可能性が書き記されるものとしての絵日記の性格に着眼した。『うつほ物語』の影響を指摘する先行研究を踏まえながらも、源氏の絵日記なるものが、絵を添えた『土佐日記』のような性格を持っていたものとして想像される、という意見を新たに提示した。また、『蜻蛉日記』の享受や、『狭衣物語』の飛鳥井女君の絵日記、中世王朝物語『浅茅が露』の絵日記の例についても検討を行った。その結果、源氏の絵日記は姫君のために制作したわけではないが、娘に自らの経験や記憶が込められた絵日記を伝えること

によって、明石の姫君に六条院の文化を引き継ぐ役割を与えていく意味があるという結論が導き出された。

第六章においては、源氏の明石の姫君への書道教育について取り上げた。明石の姫君は生まれてから明石で過ごし、後に六条院に引き取られるが、源氏に教育を受けることによって、源氏の娘としてふさわしい教養を備えていく。特に、明石の姫君が「初音」巻で源氏に指導を受ける場面を分析した。また、「野分」巻を取り上げ、硯が明石の姫君のものとして提示される理由について触れた。何気なく配置されているようでありながら、突然出された文房具が姫君のものであったことは、源氏が将来に姫君の后にのぼる予言を信じて、着実に書道教育を行っていたことを意味すると読み解いた。

第七章においては、朱雀院の女三宮への愛情について論じた。第四章で触れた用例の「点つかる」と関わって提示される物語の本文によると、女三宮と柏木の密通は、姫君教育においては望ましくない反例として提示されるものである。まず、女三宮の源氏への降嫁が彼女の養育を前提にしたものであったことを、「はぐくむ（育む）」という表現に注目して論じた。また、朱雀院の五十の賀が三度に渡って延期されることの根底には、女三宮の密通の文脈が置かれていることを述べ、娘としての役割を十分に果たせない側面について言及した。朱雀院の娘に対する愛情は、女三宮の出家においても再確認されるが、その溺愛によって育てられた娘の人生には弱点があったことを、玉鬘の例と比べながら考察した。

第三編の第八章においては、玉鬘を源氏の養女という視点から取り上げた。彼女の血筋が藤原氏であることは本文で「藤原の瑠璃君」と明確に示されている通りであるが、本論では源氏の養女として活躍する姿に注目した。先の第四章では明石の姫君とは異なり、成熟している姫君の例として玉鬘について論じ、また、第七章では女三宮と対照的に賢明な玉鬘について述べたが、第八章では「竹河」巻まで含めて、玉鬘についてより本格的に取り上げた。玉鬘は養女という立場から源氏の四十の賀を主催するが、実父の左大臣家の参加を導き、それによって両側の和解の場が設けられる。二人の父を持ちながら、能動的に努力して人生を切り開く玉鬘の姿について論じた。

第九章においては、「このもと」の歌ことばの調査から薫の実父柏木に対する思いについて論じた。従来の人物論においては、薫の造型上の矛盾が指摘されてきた。宇治の姫君に恋する姿や出家を求めて修行に励む姿が同時に描かれ、その性格を一筋で説明するのが容易ではなかったからである。しかし、本論では薫にそのような二つの側面が存在することを認めた上、「総角」巻の唱和歌の中の薫の歌の意味について新たに考えてみた。そのために、『古今集』や『拾遺集』、『伊勢集』や『紫式部集』、『栄花物語』などの和歌を調べ、「このもと」の歌ことばには、親を失って残された子を指す文脈が関わっていることを明らかにした。そこで、薫の歌から実父に会えないことに起因する薫の無常観を読み解いた。

補論の第十章においては、『源氏物語』を読んだ二人の知識人について論じた。まず、日本留学を経験し、植民地朝鮮で活躍した六堂崔南善（一八九〇～一九五七）について論じた。彼が韓国において最初に『源氏物語』を詳細に読んだ学者の一人であることは、先行

研究によって指摘されてきたが、その根拠である彼の日本語原稿は二種類の『六堂崔南善全集』には含まれていなかった。筆者は日本語講演録が載せられている小冊子を発見し、本論にその過程を報告した。さらに、原文の表現の検討により、崔南善が日本の歴史家の萩野由之博士（一八六〇～一九二四）の言葉を引用していることを明らかにした。

以上の考察を通じて、『源氏物語』に描かれる教育の場面を追って、二人の人物がお互いを父と子として認識していく過程を読み解いた。その結果、『源氏物語』における父と子は、血縁だけでなく、教育によって結ばれていることを指摘した。取り上げた様々な例から窺えるように、子を引き取って近くで教育する行為から、父と子としての関係が生まれる。また、玉鬘や薫のように、血筋上は父と子ではないが、源氏の子として生きていく人物もある。『源氏物語』は、血縁だけでなく、知識や教育によって繋がる関係の大切さについて語り、学問や文化によって築かれる社会の理想を、父と子の教育の場面を通じて提示している。